アイヌ語の名詞抱合

Noun incorporation in Ainu

小林美紀
KOBAYASHI Miki

要旨　アイヌ語では名詞を抱合した動詞形というのが見られる。先行研究では他動詞の主語抱合、他動詞の目的語抱合、自動詞の主語抱合があり、抱合される名詞の意味役割は他動詞の対象、自動詞の対象、充当接頭辞によって道具や場所も可能であり、名詞＋自動詞の場合、その動詞は非対格自動詞であることがすでに指摘されている。本稿ではこれを踏まえ、動詞に名詞が抱合され結果として、名詞句を一つ取る一項動詞が形成される場合、残りの一つを埋める名詞はその意味役割が動作主である場合、対象である場合、（抱合された名詞の）所有主である場合もあり、ときには基本形の項ではない場合もあるが、いずれの場合も格表示は主格となり、主語となることを述べる。そして、一項動詞が使役接尾辞を取らずに名詞を抱合する際には、一項動詞に名詞が直接抱合される場合であっても、動詞に充当接頭辞が接頭した上で名詞が抱合される場合であっても、その動詞は対象を主語とする非対格動詞であることを述べる。

１．はじめに

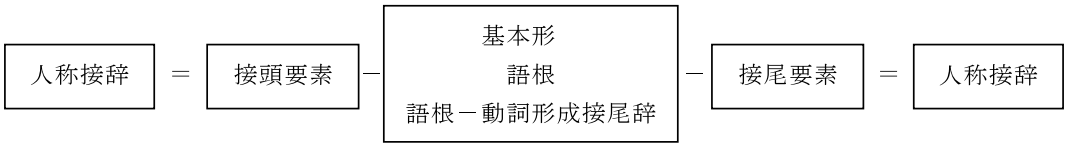
アイヌ語では動詞の項となる名詞（名詞句）を動詞の中に取り込んだ形になっているものが見られる。このような現象は一般的に「抱合」と呼ばれる。アイヌ語の抱合に関しては先行研究にいくつかの言及があり、前部要素と後部要素の関係に着目した分析が行われている。つまり、前部要素の名詞が後部要素の主語であるのか、目的語であるのかという点を中心とした言及がなされている。

本稿ではこうした先行研究を踏まえ、抱合される名詞はどのような機能を持つものであるのか、名詞を抱合する動詞はどのような動詞であるのかを明らかにすることを目的とする。

２．アイヌ語の動詞構造

アイヌ語の名詞抱合に関して具体的に見ていく前に、アイヌ語動詞の構造について概観する。

基本的にアイヌ語の動詞は以下の図のような構造になっている。本稿では他に接頭要素や接尾要素を接合させることなく一項動詞として機能するものを一項動詞の「基本形」、二項動詞として機能するものを二項動詞の「基本形」と呼ぶことにする。基本形は語根そのものが基本形である場合と、語根に動詞形成接尾辞が接尾した形態になっているものがあり、この基本形からさらに様々な動詞が形成される。その際に基本形には複数の要素が接合する場合もある。次のように動詞の基本形に接頭要素や接尾要素が接合し、さらにその外側に人称接辞が接合する形態になっている。



接尾要素に相当するものとしては使役接尾辞 -re/-te/-e、-ka などがある。

接頭要素としては接頭辞や名詞がある。動詞のとり得る名詞句の数を増減させるという観点からみると接頭要素は三種類に分けることが出来る。

一つ目は動詞のとる名詞句の数を増減させないものであり、副詞的な働きをする接頭辞が挙げられる。また、動詞のとり得る名詞句の数を一つ減らすと同時に、それ自身も名詞を要求するタイプの接頭辞や名詞もこの中に含まれる。具体的には e-「～の頭」、o-「～の尻」という接頭辞や名詞の所属形が挙げられる。これらは動詞に接頭すると動詞が必要とする名詞部分を一つ埋めるが、それと同時にそれ自身の所属先を必要とするものである。そのため、これらが接頭しても、動詞のとり得る名詞句の数は増減しない。例えば、ca「～が～を切り取る」という動詞は二項動詞であるが、「～の頭」という意味の接頭辞 e- が接頭すると、eca という形になり、「～が～の頭を切り取る」という意味になる。基本形 ca が必要とする二つの名詞句のうち一つは接頭辞 e- によって埋められるが、e- 自体の所属先が必要となるため、e- が接頭しても動詞は二項動詞である。このようにこのタイプの接頭辞は接頭しても動詞のとり得る名詞句の数を増減させることがない。

二つ目は動詞のとり得る名詞句の数を一つ増やすタイプであり、具体的には e-「～について／　～でもって／　～（場所）で」、ko-「～に対して／　～とともに」、o-「～（場所）に／　～（場所）へ」の三つの接頭辞がそれに相当する。例えば、ran「～が下りる」という一項動詞に o-「～（場所）に」という接頭辞が接頭すると、oran「～が～（場所）に下りる」という意味の二項動詞になる。また、ranke「～が～を降ろす」という二項動詞にこの接頭辞が接頭すると、oranke という形になり、「～が～（場所）に～を降ろす」という意味の三項動詞になる。このようにこれらは接頭すると動詞のとり得る名詞句の数を一つ増やすのである。以下ではこれらの接頭辞を充当接頭辞[1]と呼ぶ。

最後に動詞のとり得る名詞句の数を一つ減らすものが挙げられる。接頭辞としては yay- 「自分」、i-「もの」、u- 「互い」、ci-「自ら」、si-「自分」、he-「頭」、ho-「尻」[2]がある。また、名詞の概念形もこれに相当する。例えば、kiru「～が～を向ける」という二項動詞に he-「頭」という接頭辞が接頭すると、hekiru「～が（自分の）頭を向ける、～が振り向く」という一項動詞になる。同様に、koyki 「～が～を捕る」という二項動詞について名詞 cep「魚」が接頭要素となると、cepkoyki「～が魚を捕る」という一項動詞になる。このようにこれらは動詞に接頭すると、動詞のとり得る名詞句の数を一つ減らす働きをする。

前に述べたように、以上に挙げた要素の外側に接合するのが人称接辞である。そのため、アイヌ語では基本形に複数の要素が接合したとしても、一語の動詞であるか否かを人称辞によって判断することができる。例えば、例に挙げた cepkoyki「～が魚を捕る」という

[1] 金田一京助（1960）「アイヌ語学講義」ではこれらの接頭辞を「充当相（applicative）の接辞」としている。

[2] yay- と si- に対して同じ「自分」という訳を与えたが、両者の違いについては検討が必要である。

動詞は一人称単数主格の人称接辞 ku＝が接頭すると、ku＝cepkoyki「私が魚を捕る」[3]となる。動詞の最も外側に接合するのが人称接辞であるので、この形は cepkoyki で一語であると判断でき、名詞 cep が動詞 koyki に抱合された形であると見なすことが出来る。また逆に cep ku＝koyki という形の場合、cep は動詞に抱合されておらず、動詞の外に独立して置かれていると考えることが出来る。

また、一部の人称では一項動詞と二項動詞以上に付く接辞が異なるため、動詞が一項動詞であるのか、または二項動詞以上であるのかということを人称接辞から判断できる。例えば、除外的一人称複数主格の人称接辞は一項動詞か、二項動詞以上かによって異なる接辞を用いる。一項動詞の場合は＝as が接尾し、二項動詞以上の場合は ci＝が接頭する。cepkoyki の場合は一項動詞であるので、cepkoyki＝as「私達は魚捕りをする」という形になり、koyki の場合は二項動詞であるので ci＝koyki「私達は～を捕る」のよう ci＝が接頭する。このように一部の人称では一項動詞か、二項動詞以上異なる接辞を用いるため、どちらの接辞が接合するかによって、その動詞が一項動詞であるのか、二項動詞であるのかを判断することが出来、場合によってはそれにより名詞が抱合されているのか否かを見分けることが可能となる。

以下本稿では人称接辞の接合の仕方を見ることによって一語であるか否かを判断することにする。

3．アイヌ語の名詞抱合に関する先行研究

ここでは先行研究ではどのような言及がなされているかを整理する。初めに述べたように、先行研究ではアイヌ語の名詞抱合に関して前部要素と後部要素の関係を中心に説明がされている。つまり、動詞の主語であるのか、目的語であるのかという観点からの分析である。

3.1　佐藤（1992）

佐藤知己（1992）「「抱合」からみた北方の諸言語」ではアイヌ語の抱合に関して「抱合される名詞語幹は動詞語幹に先行する。他動詞主語（極めてまれ）、自動詞主語、目的語の抱合がある。他動詞主語、または目的語を抱合して形成された動詞は、自動詞の活用を行う。」（佐藤（1992）：196）としている。

そして他動詞主語の抱合の例として ku＝koy-yanke「私を波が上げる」、ku＝nis-rey-ere「私は雲が静かに運ぶ」を挙げている。また、このような場合に「動詞は自動詞となるので、受動者の「私」は目的格ではなく主格の ku- で表される」（佐藤（1992）：196）としている。

また、自動詞主語の抱合の例としては明らかな抱合の例として teke-pase＝an「我々の手がなえる」を挙げている。これは名詞の所属形を抱合した形であるが、「他動詞が名詞の所属形を抱合している確実な例はないようである。」（佐藤（1992）：198）としている。

目的語抱合の例としては ku＝wakka-ku「私は水を飲む」、ku＝turi-ecipo「私は竿で漕ぐ」を挙げている。そしてこの後者の例に関して「この例は道具名詞の抱合の例のように

[3] 引用文中（用例を除く）以外では統一して人称接辞は「＝」で区切って表示する。

みえるが、この場合、turi は 'ecipo「～を使って漕ぐ」という動詞の目的語と考えられるので、チュクチ語等の道具の抱合とは異なる。アイヌ語では抱合された名詞は後続の動詞の主語か目的語として機能するのが普通である。」（佐藤（1992）：198）としている。

3.2　柴谷（1992）

柴谷方良（1992）「アイヌ語の抱合と語形成理論」では「アイヌ語抱合現象の範囲」として五種類のもの[4]をあげているが、そのうち名詞に関する部分のみを見ると「《主語に対応する名詞の抱合》」「《目的語に対応する名詞の抱合》」「《付加詞に対応する名詞の抱合》」の三種類が挙げられている（柴谷（1992）：205-208）。

主語に対応する名詞の抱合の例としては以下のようなものをあげている。

(1)　sir-pirka「天気がよい」：sir「天候」、pirka「良い」
(2)　sinnam-an「寒い」（樺太方言：村崎 1979）：sinnam「寒さ／寒い」（＜sirnam「天候-冷たい」？）、an「～がある／～になる」
(3)　kunneiwa-an「朝になる」：kunneiwa「朝（に）」（kunne-i-wa「暗い-時-から」？）
(4)　kane rakko o-tumi-osma「金のラッコから（の為に）戦が始まった」（虎杖丸）：kane「金」、rakko「ラッコ」、o-「充当相」、tumi「戦」、osma「～に入る」
（柴谷（1992）：205）

そして、「自動詞の主語に相当する(1)～(3)の表現は、成句的な意味内容からして多分に固定化した表現であって、上のような分析的な表示は語源的な分析に外ならないと考えるべきかも知れない。一方、これらがいまだに分析的に認識されていると仮定した場合には、主語－動詞という文単位における語順と同一の形式であるので、抱合が起こっているのかどうかが判別しにくい」（柴谷（1992）：206）としている。

目的語に対応する名詞の抱合の例としては cise-kar（「家-～を造る、家造りする」）、in-aw-ke（「イナウ-～を削る、イナウ作りする」）などを挙げている。

また、「《付加詞に対応する名詞の抱合》（充当相を経て）」の例としては ratki apa a-sa-pa-e-puni「私は吊し戸を頭で上げた」（ratki「ぶら下がる」、apa「戸」、sapa「頭」、e-充当相、puni「～を持ち上げる」）（柴谷（1992）：206）などを挙げている[5]。

興味深いのは意味役割という観点から抱合される名詞について言及している点である。アイヌ語は他動詞の対象、自動詞の対象、充当相を経て道具、随伴者なども抱合の対象となると言えるとしている。

3.3　佐藤（1997）

佐藤知己（1997）「アイヌ語の特徴と現状」ではアイヌ語の単語形成法の興味深い特徴

---

[4]「《主語に対応する名詞の抱合》」「《目的語に対応する名詞の抱合》」「《付加詞に対応する名詞の抱合》（充当相を経て）」「《助詞の抱合？》」「《修飾語の抱合》」を挙げている。（柴谷（1992）：205-208）

[5] 柴谷（1992）で「充当相」と呼ばれているものは本稿で充当接頭辞として挙げたものであり、具体的には e-「～について／　～でもって／　～（場所）で」、ko-「～に対して／　～とともに」、o-「～（場所）に／　～（場所）へ」の三つである。

の一つとして抱合を紹介している。佐藤（1992）で例に出されていた koy-yanke を挙げ、「波が私を陸へ上げる」をこの動詞を使って表現すると、ku＝koy-yanke になり、「ku-は一人称主格の形だから、もともと目的語であったものが、最終的には動詞の主語に「格上げ」されてしまったわけである。このような現象は raising「昇格」と呼ばれ」（佐藤（1997））るとしている。

また、佐藤（1992）、柴谷（1992）では挙げられていないタイプの抱合についても言及している。それは sir-ko-peker のような構造の動詞である。「この単語は ku-sir-ko-peker「私が夜を明かす」のように使うが、もともとは、「私（ku-）に対して（ko-）天候が（sir-）明るくなる（peker）」という構造をしていると考えられる。おもしろい点は二つあって、一つは接頭語 ko- の「目的語」であるはずの「私」が、実際には動詞全体の「主語」として現れているという点で、言語学的には既に触れた「昇格 raising」と呼ばれる現象を引き起こしていると考えられることである。もう一つは、ko- の現れる位置で、なぜこのように真ん中に現れなければならないかが問題である。おそらくは、sir-peker が派生や屈折に関して閉じた動詞であるということが原因だと考えられるが、いわば語幹の中に割って入る、とでも評したいような構造がアイヌ語にあることは、私にとって驚異であった」（佐藤（1997））と説明している。そしてこれと同じ構造を持つと考えられる語として kur-ko-tunas（「影-～に対して-早い、中風になる」）や「運が悪い」とよく訳されている maw-ko-wen（「風-～に対して-悪い」）を挙げている。

3.4　中川（2001a）

中川裕（2001a）「自動性・他動性とアイヌ語の動詞」では佐藤（1992）での言及に触れ、teke-pase のような動詞、つまり、自動詞が所属形名詞を主語とするような動詞として、田村すず子（1973）「アイヌ語沙流方言の合成動詞の構造」で挙げられている動詞 kera-an「～の味-ある、おいしい」、kewe-ri「～の骨・体-高い、丈が高い」、paro-askay「～の口-うまい、歌がうまい」を挙げた上で、「上記からの帰結として、自動詞に主語が抱合する場合、その主語は何かの一部を成しているという意味的な条件が必要だということになる」とし、「主語＋自動詞型の合成（抱合）における所属形という制約」が日本語にも見られるとしている（中川（2001a）：15）。「影山（1993）は、名詞-動詞複合語について論じている個所で、自動詞の主語でそうした複合語に現れるのは「非対格動詞の場合だけである」」（中川（2001a）：15）としているとした上で、影山（1993）からの例である「波立つ、泡立つ、色あせる、色づく、苔むす、息詰まる、目覚める、色気づく」を挙げている。そして、これらは「海が波立つ」、「石鹸が泡立つ」、「着物が色あせる」のようにさらに主語を取ることができ、「海の波」「石鹸の泡」「着物の色」のように後者が前者の部分をなすとしている。影山（1993）ではこうした自動詞の主語で複合語に現れるのは非対格動詞の場合であることが論じられているが、中川（2001a）ではアイヌ語の場合も同様に名詞＋自動詞型に表れる動詞は非対格自動詞であることを示唆している。

3.5　先行研究での言及

先行研究での言及では、動詞が名詞を抱合する場合、次の三通りがあることが指摘されている。

① 他動詞の目的語抱合
② 他動詞の主語抱合
③ 自動詞の主語抱合

①の他動詞の目的語抱合について佐藤（1992）では wakka-ku「水を飲む」のような動詞の ku「飲む」に対する wakka「水」のように基本形そのものの項になる名詞と共に、充当接頭辞 e-、ko-、o- が基本形に接頭した場合の対応する名詞に関しても目的語として扱っている。一方、柴谷（1992）ではこの二者を区別し、一方を目的語に対応する名詞の抱合、つまり、他動詞の目的語とし、もう一方を付加詞に対応する名詞の抱合としている。

②の他動詞の主語抱合は佐藤（1992）では koy-yanke「波-～を陸に上げる」のような基本形が他動詞である場合と nis-reye-re「雲-這う-～させる」のように基本形が自動詞のものに使役接尾辞 -re が付いた例が挙げられている。

③自動詞の主語抱合に関しては佐藤（1992）では teke-pase「～の手-～が重い、手がなえる」を例に挙げている。これは名詞の所属形が動詞の主語になっている形のものである。一方、柴谷（1992）では sir-pirka のような例が挙げられていたが、先に述べたように本稿では人称接辞の接合の仕方を見ることによって一語であるか否かを判断するので、このような動詞は主語となる名詞を抱合した形である可能性はあるが、人称接辞は接合し得ないために一語であると判定することができないため、考察の対象から除外する。また、佐藤（1997）で挙げられていた sir-ko-peker のようなタイプの動詞もある。この場合、sir は peker「明るい」の主語となっている。また、柴谷（1992）での指摘では抱合される名詞の意味役割は他動詞の対象、自動詞の対象、充当接頭辞によって道具や場所も可能としている。

中川（2001a）では③のような場合、その動詞は非対格自動詞であるとしている。

4．分析の観点

本稿ではアイヌ語の名詞抱合に関して、抱合される名詞はどのような機能を持つものであるのか、名詞を抱合する動詞はどのような動詞であるのかという点から考察を進める。考察を進める上で「自動詞」、「他動詞」という用語を用いると、自動詞とは何か、他動詞とは何かという定義をすることが必要となる。これを決定するためには動詞の意味的な側面および名詞句をいくつとることが出来るかという機能的な側面の双方からの検討が必要となり、そのどちらを優先させるかによって「自動詞」「他動詞」の定義に違いが生じる。意味的な側面と機能的な側面の両方を重視し、この二者を区別するため、本稿では自動詞、他動詞という用語を用いずに、動詞の必要とする名詞の数が一つである場合を「一項動詞」、二つである場合を「二項動詞」と呼ぶことにする[6]。また、以下の分析では基本形が一項動詞であるのか、二項動詞であるのかを中心に抱合された名詞がどのような機能を持つものであるのかを見ていく。

[6] ただし、引用文中では自動詞、他動詞という用語を用いる。また、名詞句を三つ必要とする三項動詞もあるが、本稿では一項動詞、二項動詞を分析の対象とした。

また、名詞を抱合する動詞はどのような基本形であるのかという観点から見ていくために、抱合される名詞に関しても基本形、または基本形に使役接尾辞に付いた形の項となる名詞を中心に扱う。よって充当接頭辞によって派生した動詞に関してはこれより前に基本形、あるいは基本形に使役接尾辞の付いた形の項となる名詞がない場合は考察から除外する。

4.1 「意味役割のレベル」と「格のレベル」、「文法機能のレベル」

抱合される名詞はどのような機能を担うものであるのかという点に関しては意味役割という観点から考察する。

佐藤（1992）では koy-yanke「波-〜が陸に上げる」のように主語が抱合された動詞の場合、受動者「私」の人称接辞が接合する際には、この動詞自体が自動詞であるので、受動者「私」は目的格ではなく、主格の人称接辞で示されることが指摘されていた。また、佐藤（1997）ではこれは「昇格 raising」と呼ばれる現象であると説明されていた。このように名詞の抱合が起こると、意味上の目的語が主格の人称接辞で示されることがある。

角田太作（1991）『世界の言語と日本語』では「文法の研究をする時に、下記の四つのレベルを区別することが大切である」（角田（1991）：167）として「意味役割（semantic roles）のレベル」、「格（cases）のレベル」、「情報構造（information structure）のレベル」、「文法機能（grammatical functions、syntactic functions、grammatical relations など）のレベル」を挙げている。

このうち、意味役割のレベルと格のレベル、文法機能のレベルに関する記述を見てみる。

意味役割のレベルは「文の中にある名詞、代名詞、副詞などが表す意味についての、ある種の分類である」とし、「動作主（または、動作主体とも）、対象、受取人、受益者、感情・感覚の持ち主、所有者、仲間、行き先、出発点、場所、時間、道具、など」が用いられるとしている（角田（1991：167）。

格のレベルについては「格は名詞、代名詞、副詞などに現れる、または、付けられる、形の一種である。格は形に関することであることを強調しておきたい。」とし、「主格、対格、能格、絶対格、与格、所格、方向格、奪格、仲間格、道具格、所有格、など」と挙げている（角田（1991）：167）。

文法機能のレベルに関しては「これは、名詞、代名詞、副詞などが文中でどのような役目をするか、どのように働くか、どの様に使われるかによる分類である」とし、「主語、目的語（直接目的語、間接目的語）、副詞句、呼掛け句など」を挙げている（角田（1991）：169）。

先に述べたようにアイヌ語では人称を人称接辞によって表示する。人称接辞によって、主格か目的格かは区別されるのであるが、三人称の場合は何も表示されない。本稿では人称接辞の接合の仕方を一語か否かの判断基準とし、人称接辞のついているものを考察の対象としているため、動詞が名詞句を二つとり得る場合、一方に主格の表示がされていれば、それが主語であり、もう一方は目的語と判断できる。

名詞が抱合され、昇格が起こっている koy-yanke のような動詞では、意味役割のレベルと格のレベルとの対応関係に他の多くの動詞と違いが見られる。意味役割のレベルと格のレベル、文法機能のレベルが必ずしも並行ではない場合があるのである。つまり、意味役割のレベルで対象であるものが常に目的格で表示され、目的語であるわけではないのである。

本稿では名詞がどのような機能を持つかという点についてはこの意味役割という観点か

ら見て行くことにする。

4.2　非能格自動詞と非対格自動詞

中川（2001a）では影山（1993）での言及に触れて、自動詞が主語を抱合する場合、その動詞は非対格自動詞であるとしていた。影山（1993）では自動詞には非対格自動詞と非能格自動詞の二種類があり、「意図的動作を行う動作主（Agent）を主語にとる動詞」が非能格自動詞、「意図を持たずに受動的に事象に関わる対象（Theme）を主語にとる動詞」が非対格自動詞であるとしている（影山（1993）：43）[7]。そして、他動詞、非能格自動詞、非対格自動詞の三種類の項構造を以下のように示している。

(11) a. 他動詞：（Agent　〈Theme〉）
　　b. 非能格自動詞：（Agent　〈　　〉）
　　c. 非対格自動詞：（　　〈Theme〉）

（影山（1993）：47）

このように一項動詞（自動詞）にはその項の意味役割が動作主であるか対象であるかによって二種類の異なる性質の動詞があると言える。名詞を抱合するのはどのような動詞であるのかに関してはこの「非対格動詞」「非能格動詞」という観点から見ていくことにする。

5．名詞を抱合した動詞の分析

具体的にどのようなタイプがあるのかを見ていく。

5.1　二項動詞（基本形）の名詞抱合

基本形が二項動詞の場合は意味役割という観点から見ると、二種類に分けられる。一つは対象を抱合したものであり、もう一つは自然力[8]を抱合したものである。また、対象を抱合したものには基本形に名詞が直接接頭している形である動詞と充当接頭辞を挟んで名詞が接頭している形のものがある。

---

[7] 影山（1993）で挙げられている例文をそのまま用いると、「男の子が女の子をいじめた」という文において動作主（Agent）は男の子であり、対象（Theme）は女の子である。「男の子があばれた」という文において男の子は動作主（Agent）である。一方、「子供が木の枝を折った」という文においては動作主（Agent）は子供であり、対象（Theme）は木の枝であり、「木の枝が折れた」という文においては木の枝は対象（Theme）である。「男の子があばれた」と「木の枝が折れた」という二つの自動詞文において「男の子」と「木の枝」は共に主語であるが、意味役割という観点からすれば、「男の子」は動作主（Agent）であり、「木の枝」は対象（Theme）である。他動詞文では、対象（Theme）の「木の枝」は目的語となる。

[8] バーナード・コムリー（1992）には「動作主はある動作の意識的な起動者、道具は動作を遂行するために動作主が使う手段として両者を区別した場合、The wind opened the door〈風がドアを開けた〉における the wind に対しては、たとえば自然力のような第 3 の意味役割が必要になる。なぜなら、風は意識的な起動者でもないし、意識的な起動者が使う道具でもないからである」（コムリー（1992）：60）としている。よってここでは影山（1993）で示されていた他動詞の項構造（Agent〈Theme〉）の Agent の位置に現れるものであっても、それ自身が意志を持たないと考えられる場合、その意味役割を自然力とした。

5.1.1　Aタイプ

抱合される名詞が対象であり、基本形に直接接頭しているもの（以下Aタイプとする）を見ていく。Aタイプの動詞の例[9]を以下に挙げる。

set-cari	檻-～をばら撒く、檻をばらす
cep-koyki	魚-～を捕る、魚を捕る
haru-kar	食糧-～を採る、食糧を集める
sake-kar	酒-～を作る、酒を作る
kam-tuye	肉-～を切る、肉を切る
haru-sanke	食糧-～を出す、食糧を出す

対象を抱合した動詞の用例 set-cari を(1)として以下に挙げる。また、意味役割と格、文法機能という観点から見たものを(1)' とする。

(1)　sinean ancikar set-cari＝an　　hine　soyne＝an
　　ある　晩　檻-～をばらす＝一人称主格　～して　外に出る＝一人称主格
　　ある晩、私は檻を掻き壊して外に出た。
　　［アイヌ叙事詩　神謡・聖伝の研究：74］

(1)'	set -	cari	=	an
	檻	～をばらす		一人称
意味役割のレベル	対象			動作主
格のレベル				主格
文法機能のレベル	目的語			主語

名詞が抱合されず、独立して動詞の外に置かれる場合には次の(1)" ような形が予測される。

(1)"	set	a	=	cari
	檻	一人称		～をばらす
意味役割のレベル	対象	動作主		
格のレベル		主格		
文法機能のレベル	目的語	主語		

Aタイプの動詞では名詞を抱合する場合、動詞外に独立して置く場合と意味役割のレベル、格のレベル、文法機能のレベルは平行になっている。

[9] 例を取り上げる場合、方言を統一した方が望ましいが、一部のタイプはまれにしか見られない形であるため、本稿では方言を限定しなかった。なお、用例のローマ字表記及び訳は引用者による。

5.1.2　Bタイプ

次に抱合される名詞が対象であり、基本形に充当接頭辞を挟んで名詞が接頭している形のもの（以下Bタイプとする）を取上げる。Bタイプの動詞の例を以下に挙げる。

op-ko-rewe　　矛-～に対して-～を曲げる、～に対して矛を曲げる
sik-ko-tesu　　目-～に対して-～を反らす、～を見つめる
apa-ko-seske　戸-～に対して-～を閉じる、～に対して戸を閉める

このタイプの用例を⑵として以下に挙げる。また、意味役割と格、文法機能という観点から見たものを⑵’とする。

⑵　op kurpoki a＝op-ko-rewe
　矛　～の下　一人称主格＝矛 -～に対して - 曲げる
　（彼の）矛の下に私は（私の）矛を撓らせた。

［「虎杖丸」：190］

⑵’	a　=	op　-	ko　-	rewe
	一人称	矛	～に対して	～を曲げる
意味役割のレベル	動作主	対象		
格のレベル	主格			
文法機能のレベル	主語	目的語		

名詞が抱合されず、独立して動詞の外に置かれる場合には次の⑵”ような形が予測される。

⑵”	op	a　=	ko　-	rewe
	矛	一人称	～に対して	～を曲げる
意味役割のレベル	対象	動作主		
格のレベル		主格		
文法機能のレベル	目的語	主語		

Bタイプの動詞では名詞を抱合する場合、動詞外に独立して置く場合と意味役割のレベル、格のレベル、文法機能のレベルは平行になっている。

5.1.3　Cタイプ

自然力を抱合したもの（以下Cタイプとする）の例[10]を以下に挙げる。

koy-yanke　　波-～を陸に上げる、～を波が陸に上げる

[10] 筆者自身は用例を確認できていないが、田村（1996）で rera-paru（「風-～を飛ばす、風に飛ばされる」）、rera-suye（「風-～を揺らす、風に揺らされる」）などが自動詞として挙げられている。

urki-o[11]　　シラミ-～に発生する、～にシラミが発生する

ku = koy-yanke の構造について、名詞を抱合している場合を(3)、動詞外に独立して置かれている場合を(3)’として示すと次のようになる。

(3)	ku	=	koy	-	yanke
	一人称		波		～を陸に上げる
意味役割のレベル	対象		自然力		
格のレベル	主格				
文法機能のレベル	主語		目的語		

(3)’	koy	en	=	yanke
	波	一人称		～を陸に上げる
意味役割のレベル	自然力	対象		
格のレベル		目的格		
文法機能のレベル	主語	目的語		

先行研究で指摘されていたようにＣタイプの場合、名詞が抱合される場合と抱合されない場合で格のレベル、文法機能のレベルで違いが生じる。自然力が抱合される場合は、対象は主格で表示されるのに対して、動詞外に独立して置かれる場合は目的格で表示される。

5.2　一項動詞（基本形）の名詞抱合

基本形が一項動詞の場合について見ていく。一項動詞の場合には意味役割の観点から見ると、自然力の抱合と対象の抱合がある。また、動詞の構造からすると、基本形に使役接尾辞が接尾したものに名詞が抱合されるもの、基本形に充当接頭辞が接頭した上で名詞が抱合されるもの、基本形に直接名詞が抱合されるものの三種類があり、以下に挙げる四つのタイプがある。

5.2.1　Ｄタイプ

基本形に使役接尾辞が接尾したものに名詞が抱合され、その名詞が対象であるもの（以下Ｄタイプとする）がある。

(4)　an＝i＝ronno nankor kus　kotan-tup-te＝an
不定人称主格＝一人称目的格＝～を殺す　～だろう　～ので　村 - 移る - 使役＝一人称主格
私達は殺されてしまうだろうから、村を移そう。
［静内地方の伝承Ｖ―織田ステノの口承文芸(5)：34］

[11] o は二項動詞としては中川 (1995) で「①～に乗る。 ②～に入っている。～にある。 ③～に発生する。」（中川（1995）：108）のように記述されている。名詞句を二つ取る二項動詞ではあるが、そのうち一つは場所をとる動詞であり、対象と動作主をとる典型的な他動詞の性質とは離れていると言える。

(4)'	kotan	–	tup	-	te	=	an
	村		移る		使役		一人称
意味役割のレベル	対象						動作主
格のレベル							主格
文法機能のレベル	目的語						主語

対象となる名詞が独立で表れる場合は以下のような構造を持つと考えられる。

(4)"	kotan	a	=	tup	-	te
	村	一人称		移る		使役
意味役割のレベル	対象	動作主				
格のレベル		主格				
文法機能のレベル	目的語	主語				

このように一項動詞に使役接尾辞が接尾した動詞に対象という意味役割を担う名詞が抱合される場合は、その名詞が動詞外に独立しておかれる場合と比較してみると、動作主はどちらも主格で表される。この点は基本形が二項動詞の場合と同様である。

5.2.2　Ｅタイプ

次に基本形が一項動詞であり、それに使役接尾辞が接尾し、自然力が抱合された形になっているもの（以下Ｅタイプとする）を見ていく。Ｅタイプの動詞としては以下のようなものがある。用例としては(5)のようなものが確認できる。

rir-turse-re　　潮-倒れる-使役、潮に転がされる
wakka-mom-te[12]　水-流れる-使役、水に流される
koy-turse-re　　波-倒れる-使役、波に転がされる

(5)　oro ta　rittursere＝an　kor　yan＝an　ayne
そこ～に　潮に転がされる＝一人称主格　～ながら　陸に上がる＝一人称主格　～して
そこに私は潮に転がされながら陸に上がって
［「トゥムンチペンチャイ、オコッコペンチャイ」：135］

(5)'	rir -	turse	–	re	=	an
	潮	倒れる		使役		一人称
意味役割のレベル	自然力					対象
格のレベル						主格
文法機能のレベル	目的語					主語

[12] 中川（2001a）で佐藤（1992）の他動詞主語抱合に触れ、中川・大塚（1990）にこの動詞があることが指摘されている。

この場合に抱合された名詞である自然力が動詞外に置かれた場合は次のような形になると予測される。

(5)”	rir	i	=	turse	-	re
	潮	一人称		倒れる		使役
意味役割のレベル	自然力	対象				
格のレベル		目的格				
文法機能のレベル	主語	目的語				

このように一項動詞に使役接尾辞が接尾し、自然力が抱合された形になる場合は、抱合されずに動詞外に独立しておかれる場合との間に違いが見られる。独立して置かれる場合は抱合された際に主格で表示されていた対象が目的格で表示されると考えられる。これは二項動詞に自然力が抱合される場合と同様である。

5.2.3　Ｆタイプ

一項動詞が充当接頭辞を挟んで対象となる名詞を抱合している形のもの（以下Ｆタイプとする）を見ていく。(6)のような例がある。

(6)　nupe-ko-rapapse＝an　　kor　　inawke　　pa
涙 -～に対して - 落ちる＝一人称主格　～ながら　イナウを削る　複数
私は涙を流しながらイナウを削った。
［アイヌ民族博物館所蔵資料］

この動詞は以下のような構造を持っていると考えられる。

(6)’	nupe	-	ko	-	rapapse＝	an
	涙	～に対して			落ちる	一人称
意味役割のレベル	対象					
格のレベル						主格
文法機能のレベル	目的語					主語

また、この動詞が対象である名詞を動詞外に独立して置く場合には次のような形式をとると考えられる[13]。

[13] tu peker nupe re peker nupe a=yay-ko-ranke
二つ　澄んだ　涙　三つ　澄んだ　涙　一人称主格＝自分-～に対して-～を落とす
たくさんの涙を私は落とした　［アイヌ叙事詩　神謡・聖伝の研究：151］
以上のような例が確認できる。この場合、充当接頭辞 ko- は yay- と対応しており、ranke は nupe「涙」と a＝「私」をの二つを取っていると考えられる。
また、この場合に nupe i ＝ korapapse のように nupe「涙」を動詞外に置き、「一人称目的格＝～に対し-落ちる」のような形が可能かは確認できていない。

(6)”	nupe	a	=	ranke
	涙	一人称		～を落とす
意味役割のレベル	対象	動作主		
格のレベル		主格		
文法機能のレベル	目的語	主語		

Ｆタイプでは対象となる名詞が抱合された場合に基本形の項ではないもの、充当接頭辞の項であるものが主格となっていることが分かる。このときの名詞の意味役割は対象である「涙」が落ちる着点のように捉えることも出来る。しかし、佐藤（1997）で挙げられていた sir-ko-peker、maw-ko-wen、kur-ko-tunas もこのタイプの動詞と考えられるが、これら全てについて共通する意味役割とは考えにくい。Ｆタイプの動詞の場合に主語となるものの意味役割については検討が必要である。また、影山（1993）で自動詞には非対格自動詞と非能格自動詞の二種類があるとされていた。これらの例の基本形は rapapse「落ちる」、peker「明るい／明るくなる」、wen「悪い／悪くなる」、tunas「早い」であり、いずれも非対格自動詞であると考えられる。(6)’ で抱合されていた名詞というのは対象の意味役割を担うものであるので、(6)” のように動詞の外に独立して置かれると、もう一つの名詞である「私」は主格であるという点は変わりないが、意味役割のレベルでこの二項動詞の動作主になっている。

5.2.4　Ｇタイプ

名詞の所属形を一項動詞が抱合した形式になっているもの（以下Ｇタイプとする）について見ていく。

kema-pase　～の足-重い、足が不自由である
paro-ruy　～の口-激しい、おしゃべりだ

名詞の所属形は所属先を必要とするので、結果として形成された動詞は名詞を一つ必要とする一項動詞になっている。(7)がその例である。

(7)　tane anakne asinuma ka　kema-pase = an pe ne korka
今　～は　私　～も　～の足 - 重い = 一人称主格　もの　～である　～けれども
今や私も足が不自由なものであるけれども
[「ウラシナイの少年」: 142]

この構造は次のようになっていると考えられる。

(7)’	kema	-	pase	=	an
	～の足		重い		一人称
意味役割のレベル	対象				（対象の）所有者
格のレベル					主格
文法機能のレベル					主語

また、この対象が動詞の外に置かれた場合は次のような構造になると考えられる。

(7)”	a	=	kema	pase
	一人称		～の足	重い
意味役割のレベル	（対象の）所有者		対象	
格のレベル	所有格			
文法機能のレベル			主語	

この場合には名詞が抱合されると対象の所有者は主格で表され、名詞が動詞から独立して置かれると、所有格で表示されるようになり、格のレベルで変化が起きていると考えられる。また、このタイプは対象をとる動詞であるため、中川（2001a）で言われていたように非対格自動詞であると言える。

6．考察

これまで見てきたA～Gのタイプをまとめると以下のようになる。

	動詞構造	抱合名詞		非抱合名詞※		
		意味役割	文法機能	意味役割	格	文法機能
A	N-二項動詞	対象	目的語	動作主	主格	主語
B	N-充当接頭辞-二項動詞	対象	目的語	動作主	主格	主語
C	N-二項動詞	自然力	目的語	対象	主格	主語
D	N-一項動詞-使役接尾辞	対象	目的語	動作主	主格	主語
E	N-一項動詞-使役接尾辞	自然力	目的語	対象	主格	主語
F	N-充当接頭辞-一項動詞	対象	目的語	※※	主格	主語
G	N-一項動詞	対象		所有主	主格	主語

※本稿の例では人称接辞で表示される部分
※※充当接頭辞の項であり、基本形の項ではない。どのような意味役割になるのか検討が必要である。

二項動詞に名詞が抱合される場合、意味役割という観点から見ると対象と自然力の二種類があり、自然力では名詞が抱合される場合と抱合されない場合で格のレベル、文法機能のレベルで違いが生じる。自然力が抱合される場合は、対象は主格で表示されるのに対して、動詞外に独立して置かれる場合は目的格で表示される。佐藤（1992）で「他動詞の主語（極めてまれ）」と指摘されていたように、自然力の抱合の例はほとんど確認できない。また、影山（1993）で示されていた他動詞の項構造（Agent 〈Theme〉）の Agent の位置に入ると考えられるものであっても、確認できるのは自然力のみである。自然力の抱合がほとんど確認できないのに対し、対象の抱合はよく見られる現象である。ただし、その場合も、どのような名詞なら抱合されうるのかに関しては明らかになっていない部分が多く、今後の検討が必要である。

動詞に名詞が抱合され結果として、名詞句を一つ要求する一項動詞が形成される場合、残りの一項を埋める名詞はその意味役割が動作主である場合、対象である場合、（抱合された名詞の）所有主である場合があり、ときには充当接頭辞を埋めるものであり、基本形の項ではない場合もある。しかし、いずれの場合も格表示は主格となる。

また、一項動詞が使役接尾辞を取らずに名詞を抱合する場合は、抱合される名詞の意味役割は対象であり、動作主である場合は確認できない。中川（2001a）では名詞＋自動詞型に表れる動詞は非対格自動詞であると示唆されていた。これは本稿ではＧタイプに当たり、実際にこのタイプは非対格自動詞であることを確認した。また、本稿ではこのタイプの動詞のみでなく、一項動詞が充当接頭辞を挟んで対象となる名詞を抱合している形のＦタイプに関しても非対格自動詞であることを確認した。よって、一項動詞が使役接尾辞を取らずに名詞を抱合する場合は、動詞の構造がどのような場合でも非対格動詞であるといえる。

（こばやし・みき　本研究科博士後期課程）

参考文献

影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房
金田一京助（1931）「虎杖丸」『ユーカラの研究Ⅱ』東洋文庫　（金田一京助（1993）『金田一京助全集』９三省堂、135-504 を使用）
――――（1960）「アイヌ語学講義」『金田一京助選集』１三省堂　（金田一京助（1993）『金田一京助全集』５三省堂、133-365 を使用）
久保寺逸彦（1977）『アイヌ叙事詩　神謡・聖伝の研究』岩波書店
佐藤知己（1992）「「抱合」からみた北方の諸言語」宮岡伯人（編）『北の言語：類型と歴史』三省堂、191-201
――――（1997）「アイヌ語の特徴と現状」『北方民族博物館友の会季刊誌 Arctic Circle』 22 号　（http://www3.aa.tufs.ac.jp/~tugusk/a02/bunka/index.html を使用）
静内町郷土史研究会（1995）『静内町文化財調査報告　静内地方の伝承Ⅴ―織田ステノの口承文芸⑸―』静内町郷土史研究会
柴谷方良（1992）「アイヌ語の抱合と語形成理論」宮岡伯人（編）『北の言語：類型と歴史』三省堂、203-222
田村すず子（1973）「アイヌ語沙流方言の合成動詞の構造」『アジア・アフリカ文法研究』２　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、73-94
――――（1996）『アイヌ語沙流方言辞典』草風館
角田太作（1991）『世界の言語と日本語』くろしお出版
中川　裕（校訂）・大塚一美（編訳）（1990）『キナラブック口伝　アイヌ民話全集』１北海道出版企画センター
中川　裕（1995）『アイヌ語千歳方言辞典』草風館
――――（2001a）「自動性・他動性とアイヌ語の動詞」『ユーラシア諸言語の動詞論⑴』千葉大学社会文化科学研究科、1-18
――――（2001b）「トゥムンチペンチャイ、オコッコペンチャイ」『叙事詩の学際的研究』、91-146
――――（2002）「ウラシナイの少年」『ユーラシア言語文化論集』５千葉大学ユーラシア言語文化論講座、111-143
バーナード・コムリー（著）松本克己・山本秀樹（訳）（1992）『言語普遍性と言語類型論』ひつじ書房
村崎恭子（1979）『カラフトアイヌ語―文法篇―Sakhalin Rayciska Ainu Dialect』国書刊行会